

2026年2月8日（顕現後第5主日、A年）

メッセージ

「神様の愛を無にしない」

（マタイによる福音書5：13-20）

司祭ヨセフ太田信三

イスラエルの民には、神からの律法が与えられていました。律法には、「これを守れば人は神から離れることなく、互いを大切にしあい、平和に生き続けることができる」という、神の人間への愛が溢れんばかりに込められていました。しかし人は、文字で記された律法を自分たちの都合の良いように解釈し、そこに込められた神の愛を抜き取ってしまいました。こうして律法は人間の所有物になってしまい、その途端、律法は愛し合うどころか、裁き合い、滅ぼし合うための道具になってしまったのです。今日の福音で「これらの最も小さな戒めを一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。」というイエスの言葉は、律法を自らの所有物にしている人間への強い警告です。「律法を完成するために来た」とは、律法に込められた神の深い愛を伝えること、その愛がこの世界に実現するためにこそイエスは来た、ということです。

そのイエスが断言します。

「あなたがたは地の塩である。」「あなたがたは世の光である。」

「塩になりなさい」でも、「光になりなさい」でもありません。私たちはすでに塩であり、光なのです。16節の「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。」という箇所直訳は、「あなたがたの光が輝きなさい」です。イエスが期待しているのは、塩気も光もすでに与えられているのだから、すでに塩であり、光であるのだから、自ら塩気を無くしてしまったり、自ら光を覆い隠してはならないということです。

私たちは時として、私に塩気など、光など無いのではないかと思うことがあります。また、他者の塩味を、光を消そうとしてしまうこともあります。しかし、それではかつて律法を骨抜きにし、神の愛から離れてしまった人間と同じです。なぜなら、すでに塩気を、光を与えてくださっている神の恵み、愛を自ら無きものにしてしまっているからです。そうではなく、イエスの断言は、神の愛を甘受せよ！ということです。私たち人間は愛を受け取ることが苦手です。しかし、私は塩だ、私は光だ。それで良いのです。

今日の使徒書にある通り、私たちにとって、十字架につけられたキリストこそ栄光の主です。なぜなら十字架にこそ神の愛が示されたからです。クリスチャンとは、このイエスの栄光の光を反射する者のこと、つまり、十字架上で両手を広げるイエスの愛を全身にいただき、地の塩、世の光として生きるがクリスチャンなのです。